1949年９月17日第三種郵便物認可　毎月10日発行　第670号（通巻1174号）　定価１部40円

創立1880年
東京YMCA
2009 10 月号
発行所　東京キリスト教青年会　発行人　廣田光司
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命
東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

存在認め、出会い・交わりを大切にする
liby…Let it be YMCA

liby 新しいオープンスペース

ｌｉｂｙは「let it be at the YMCA of Tokyo」の略で、「ありのまま」をキーワードとする子どもたちの居場所です。一人ひとりがあるがままで安心していられるオープンスペースであり、子どもの成長だけでなく、人が生きる上で必要な場所であると考えています。

何をするかではなく、何ができるのかでもなく、誰と比較することもなく、あなたがあなたのままで認められる―ありのままの自分でいられる。それがｌｉｂｙです。

「居場所」の力が必要なとき

ｌｉｂｙ運営委員
農村伝道神学校講師　武田利邦

「不登校」は残念ながら多くの地域で過去最大の数を記録しています。中学では34人に1人、ほぼ3％の子どもが、学校から「逃走」しており、「アジール」（駆け込み寺）がますます必要になっています。このような「居場所」は全国に１００箇所以上あるといわれます。文部科学省や厚生労働省も「居場所」に関心をもち予算援助もするようになっています。

学校に行かれなくなった子どもたちは、日本の社会ではとりわけ大きなハンディキャップをかかえることになります。大げさに言えば「教育難民」ということもできるでしょう。

ｌｉｂｙは「スペース」というコンセプトで、東京ＹＭＣＡ山手センターから始まりました。ＹＭＣＡは、１００年以上前のイギリスで、産業革命の中で「貧窮地域」に取り残された子どもたちへのケアから出発しました。日本のＹＭＣＡでも明治時代から、学生や教会青年たちが、社会から取り残され、見捨てられた人々、特に子どもたちへの福祉や医療に多くの人材を供給し、そこから、「キ医連」（日本キリスト者医科連盟）や「賛育会」のような団体が生まれてきました。

こうした歴史を考えるとき、いまｌｉｂｙの働きで、学校化された現代の消費社会に翻弄される子どもたちへのサポートを行うことが、ＹＭＣＡの原点に戻ることではないでしょうか。

ｌｉｂｙは温かいみんなのお家

本当の自分を取り戻す場に

ｌｉｂｙ　秋田正人

「ｌｉｂｙ」（リビー）は、今から11年前、東京ＹＭＣＡの３ヵ年計画『Ｆｏｃｕｓ21』をきっかけに、21世紀を見据え、これからの時代に適合したプログラムの一つとして開発されました。ｌｉｂｙを一言で表現すると、それぞれの「存在」（Ｂｅ）が認められる「出会い」と「交わり」の場と言えるでしょう。

今、子どもの現場では、心理テストやカウンセリングとそれに基づく早期の特別支援教育がかなり一般的になってきました。

こうした状況の中、その対極にあるような「場」としてｌｉｂｙは存在しています。前者ばかりだと息が詰まりそう、そう感じる子どもたちや若者たちにｌｉｂｙのメッセージが響いているような気がします。

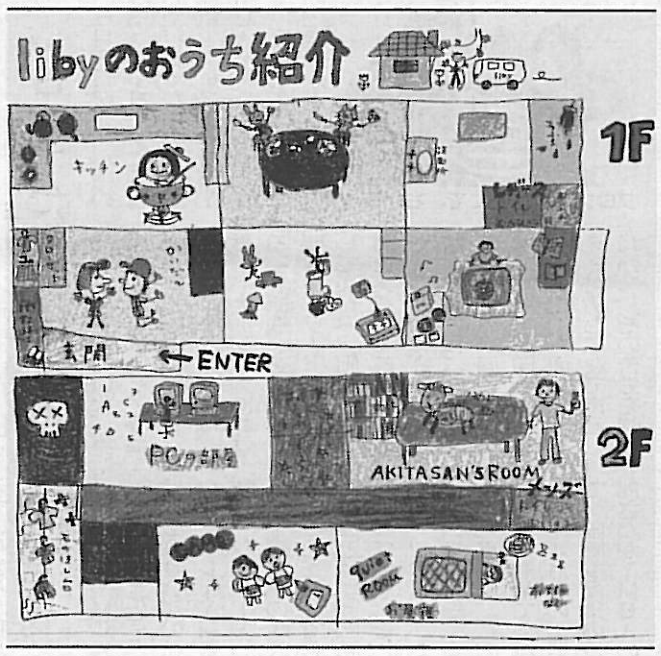
ここでは、評価の基準が異なります。背が低くても、走るのが遅くても、発達に遅れがみられたとしても、一人ひとりが、その人なりにすばらしい。そんなひとりひとりが、共に話し、遊び、食事をし、楽しみ、愚痴を言い…まるでミヒャエル・エンデの「モモ」のようなそんな存在、それがｌｉｂｙなのです。

だからこそ、子どもたちは開放感を覚え、忘れていた「素の自分」を取り戻していけるのです。人と人との関係が希薄となっていく現代、ますますその存在意義が増してくる気がしています。

私はｌｉｂｙの中に、将来のＹＭＣＡの姿を見ています。今後は、ｌｉｂｙの広がりと同時に、ここで学んだことや試行してきたことがＹＭＣＡ全体に還元されていくことでしょう。そしてＹＭＣＡとは何か、という問いかけの元に、プログラムを精査することも一つですし、ＮＰＯ、行政、他団体等との関係の中で自分たちの役割や、日本の、あるいはアジアのＹＭＣＡの一つとしての責任を果たすことも大変重要だと思います。

その結果、誰にとっても生きやすい社会の実現に寄与していく、私たちはそんな存在でありたいと思います。

お支え下さる皆さん、希望と期待を持って、これからもｌｉｂｙ、そしてＹＭＣＡを見守って頂ければ幸いです。



メンバーが書いた室内のイラスト

ｌｉｂｙの主な活動

◆新しいオープンスペース
平日の昼間、子どもたちが自由に使える秘密基地のような場所。子どもと大人が上手くマッチして運営されている。（30名）

◆ＵＲＡ―ｌｉｂｙ
20代の青年たちを中心としたグループ。それぞれのもちネタの話やフリートーク。心のオアシス。（20名）

◆ペアレンツクラブ
不登校の親の会。ここで初めて「理解された」「何でも言える」そう感じられることもしばしば。（20名）

◆ｌｉｂｙ工房
日頃の子どもたちとの出会いから学んだこと、考えたことを発信し、運動へと転換していく活動。講演会や、キャンプ活動を行う。

すべての人を一つにしてください
必要なものは備えられて

◇『世間ではともすれば金銀でも持物でも多く所有すればするほど人は幸福になると信じているようであるが、これくらい間違った考え方はない。むしろそれは逆なのであって、所有が多ければ多いほど人は心の自由を失うのである』（中野孝次著「清貧の思想」より）

◇インドで、カースト制度撤廃と女性の地位向上のために活動する修道女、シスター・チャンドラさんが10人のダリット（不可触民）の踊り手たちと3人の音楽家を連れ来日し、10月末から11月にかけて東京近郊で公演をします。シスターは「彼らの生活は過酷だけれど豊かなのです。誰かが来れば心からもてなします。何も食べるものがなければ隣からもらってきて皆で分かち合う。家族を愛し、隣人を愛す、それが当たり前のことなのです。幸せとは『集まること』『分かち合うこと』と言っています。

◇人は持つことによって逆に不自由に、不幸になっているのではないでしょうか。野の花にも、空の鳥にも、野の草にも、私たちにも、神様はすべて必要なものは備えてくださると聖書は教えています。人間が生きてゆくために必要なものはそれほど多くはないのです。私たちはその中で最も大切なものを選んでゆきたいものです。

（総主事　廣田光司）

YM・YW合同祈祷会
『いま、地球市民として生きるために』
メッセージ：
ジョージ・ギッシュ氏
（青山学院大学名誉教授
江戸川総合大学国際コミュニティ学科長）
日時：11月12日（木）
18時30分～20時30分
会場：東京ＹＷＣＡ
カフマンホール

赤▽三角

南センターの程近くに駄菓子屋がある。さいころキャラメル、ビー玉、ベーゴマ、けん玉などを見つけて思わず子ども時代を思い出す。東京にもそこ此処に空き地があり、暗くなるまで夢中で楽しんだ日のことを。▼「新しいオープンスペース―ｌｉｂｙ」は不登校や高校を中退した子どもたちが、通信制・定時制高校のレポートや宿題の手伝いをしたり、学校が終わってから友だちを求めてくる子どもたちの居場所として誕生し、11年になる。▼子どもにも将来の幸せ、豊かさを得られるようにとの思いから、早期教育やのびのび保育が流行した。あれこれ干渉されながらの生活は言われたことだけをやることに慣らされ指示されてから行動する人間を育て、過保護、過干渉により自分のやりたいことに出会う機会や楽しむ生活を奪われた。ｌｉｂｙでは、これまでと違った価値観に出会い、周りとの関係を修復し、少しゆったりとした時間の中で、これまでのことを整理し、これからのことを考えられればと思う。▼愛され、家族から当てにされる必要な存在。そういう自分を見出し、愛されている実感がもてれば、他者をも思いやる気持を育むことができる。ｌｉｂｙサポーターとしては「居場所」の必要がなくなることを、あの駄菓子屋に無邪気で明るい、元気で輝いている子どもたちが押しかける日を願いつつ。

（常議員　小原武夫）

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。